

いま求められる“旅マタギ” 狩猟の民はなぜ山を越えたのか



熊が家畜を襲う被害に悩んでいた鹿角市の一家が阿仁マタギに協力を仰ぎ、熊狩りを行った時の記念写真(マタギ資料館蔵)

1 明らかになってきた旅マタギの実態

北秋田市の阿仁地区は古くからマタギの里として知られる。熊の巻き狩りをはじめ、独特な狩猟技術が今に伝えられているが、この地の狩猟の民たちは近代以降、盛んに旅マタギに出た。旅マタギとは、いわば出稼ぎ狩猟である。交通網の発達によりその範囲は、南は近畿地方、北は樺太にまで及んだ。旅マタギは、江戸時代の中期ごろにはすでに存在していたと考えられる。ただ、マタギの文化は多くの伝承が残されているものの文献資料が乏しく、長い間その裏付けが難しかった。しかし近年、古文書の発掘や、各地に伝わる狩猟の技術と作法などの比較研究により、伝承が少しずつ裏付けられてきている。



重要有形民俗文化財である阿仁マタギの狩猟用具(北秋田市蔵)

2 旅マタギを生んだ獣害と罾猟の技術

秋田(阿仁)マタギというと、鉄砲で狩りをする姿がイメージされる。しかし、それは村田銃が普及した明治の中期以降のことだ。本来、彼らが得意としていたのは、主に罾と槍(山刀)による罾だった。江戸時代は有史以来、最も山林面積が減少した時期である。そのため各地で獣害が起きた。ニホンオオ

クマ捕獲用の罾「ヒラオトシ」の再現(写真提供/東北歴史博物館)



カミによる被害も深刻で、人に伝染する狂犬病も恐れられた。そこで注目されたのが、罾に長けたマタギの狩猟技術だった。彼らは各地から乞われて害獣駆除に赴いた。さらに天明の大

飢饉後、秋田で物価が30倍にも跳ね上がったのを機に、彼らは生きるため、積極的に旅マタギに出るようになる。狩猟技術を欲しがった出先の地に定住した者も少なくない。そして旅マタギを通じ、熊の胆や毛皮などの自前の産品ばかりではなく、例えば会津漆器など、富裕層を相手とする他産品の行商をもする独特の商業システムをつくり上げていった。



古くから、消化器系の万能薬として重宝された熊の胆(マタギ資料館蔵)

3 人と自然との距離を保つ狩猟の役割

今の日本は有史以来、森林率が高い時代である。しかし、山はかつてのような生産の盛んな場所ではなくなり、多くの山林が放置されている。太平の世が続いた江戸時代には、幕府の政策もあって罾師の数が激減したが、現代も同様に罾や林業に携わる人が少ない。そして獣害が深刻な問題となっている。マタギは古来、山に学び、野生動物の行動を熟知し、山で生きる術を連綿と蓄えてきた人々である。また、旅マタギによる他所への技術の移転は各地の狩猟技術を活性化させた。そして狩猟には、野



熊の毛皮や熊の胆は、マタギの大きな収入源だった(マタギ資料館蔵、写真提供/北秋田市)



阿仁マタギの里として知られる根子集落(写真提供/北秋田市)

生動物を集落から退け、適度な距離を保つ役割もあった。しかし、今は行き過ぎた野生動物の保護と、狩猟者の減少・高齢化、狩猟技術の衰退などの要因により、自然との距離の取り方も崩れてしまっている。今こそ、あらためてマタギという存在が果たしてきた役割に目を向け、長く培われてきた知恵と技術を見直す時なのである。